六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

津森千里 ファッションデザイナー

Chisato Tsumori / Fashion Designer

CREATOR INTERVIEW NO 99

津森千里　ファッションデザイナー

1973年、文化服装学院デザイン科に入学。卒業後、1977年株式会社イッセイ ミヤケ インターナショナルに入社し、「イッセイスポーツ」のデザイナーに。1983年、同ブランドから「I.S. chisato tsumori design」に名称が変わり、チーフデザイナーに就任。1990年、I.S.から独立して「TSUMORI CHISATO」をスタート。2003年10月に2004SSコレクションをパリで発表。以後、発表の場をパリに移す。2017年にはニューヨーク・シティ・バレエ団の依頼で、「2017 FALL FASHION GALA」の衣装をデザインするなど、多岐にわたって活動している。

NO 99

津森千里 ファッションデザイナー
CHISATO TSUMORI / Fashion Designer

「自分が楽しい」と思うことを、ずっと変わらずやり続けるために。

クリエイターインタビュー
『見る人もハッピーになれる
子どものデザイン展を六本木で』

update_2018.11.21 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

かわいいのに、凛としていて個性的。女性に圧倒的な人気を誇るファッションブランド「TSUMORI CHISATO」は、「ガーリィでセクシー、大人のためのファンタジーがあふれる、ハッピーなテイスト」を提案することをコンセプトに掲げています。津森千里さんのつくる服は、なぜ着る人をハッピーにするのでしょう。ブランドの立ち上げから 29 年を迎えた津森さんに、洋服づくりのこだわりや、アイデアの源となっているもの、そして人や街をハッピーにするヒントをうかがいました。

過去を振り返って気づいたのは、変わっていないこと。

2018 年 10 月 6 日（土）～ 24 日（水）に行った「WAKU WORK 津森千里の仕事展」は、これまで私が 40 年ほどやってきたファッションデザインの仕事を集めて、みなさんにお届けする場づくりを心がけました。私としてはワクワク楽しく仕事をしてきた結果なんだけど、これだけ一堂に会すると、自分の頭の中を覗かれているみたいな恥ずかしさもあったりして、見てくださった方はどんなふうに感じるのかしら？　自分でも頭の中がどうなっているのかときどきわからなくなっちゃうくらい、いろんなことをやってきたから、このごちゃごちゃした感じこそ津森千里だな、みたいな思いもちょっとあるんです。混沌としているのも嫌いじゃないので。展示のしかたにも、自分のにおいを振りまきたいとか、自分の世界で埋め尽くしたいっていう欲望が表れていますよね。

会場になっている 21_21 DESIGN SIGHT を設計された、安藤忠雄さんには申し訳ないですけど（笑）、子どもの頃、小屋をつくってそこを全部自分の色に染めちゃうのがすごく夢だったんです。だからこの展覧会が、津森千里の城みたいな場所になったんでしょうね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

これまでの仕事を振り返ってあらためて思うのは、変化がないってことかな。会場のショーケースに、1990 年に「TSUMORI CHISATO」を立ち上げたときのコンセプトを展示しているのですが、そこにはこんな言葉が書かれています。

"年齢にも　職業にも　何にもとらわれない　着たいものを　着たい時につくる　何よりも大切にしたいのは　素直に表現すること　可愛いものは可愛い　良いものは良い　TSUMORI CHISATO　ワールドには　スポーティも　民族調も　フェミニンもあります　そこは　あたたかく　ほのぼのとした　いごこちの良い世界でありたいと願っています "

今やっていること、考えていることとまったく変わっていないんですよね。それがずっと続いていることは、自分でもすごいなと思ったし、好きなものを好きなときにつくることをいまだにできている環境が、ありがたいなって思います。

「WAKU WORK 津森千里の仕事展」
2018 年 10 月 6 日（土）〜 24 日（水）に 21_21 DESIGN SIGHT ギャラリー 3 で開催された、津森さんの初の個展。ブランド初のパリコレクション出展作品をはじめとするアーカイブ作品や、ぬいぐるみやマトリョーシカなど長年収集してきた私物、貴重なデザイン画などを展示。会場の細部に至るまで本人が演出を手がけた。

21_21 DESIGN SIGHT
デザイナー三宅一生さんが創立者となり、2007 年、ミッドタウン・ガーデン内に竣工したデザインの展示施設。地上 1 階地下 1 階の低層建築で、設計を手がけた安藤忠雄さんは、三宅さんの服づくりのコンセプト「一枚の布」に着目して、一枚の鉄板を折り曲げたような屋根を考案。津森さんの展覧会が行われたギャラリー 3 は、開館 10 周年を機に新設された。
Photo: Masaya Yoshimura

食べたいものを考えるように、着たい服をつくる。

私にとって好きな洋服をつくることは、「今日は中華にしようかな？　それとも和食がいいかな？」みたいに、そのとき食べたいものを考えるのと一緒なのかもしれません。食べることって基本的にみんな好きだし、当たり前のことだから絶対に飽きないし、続けられるじゃないですか。服をつくることを、食べ物に例えると、すごくシンプルでわかりやすいなと思って。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

生地を買ったり、アイデアを貯め込んだりするのも、すぐに使うかわからないけれどもいつか使えるかもしれないって、冷蔵庫に食材を入れていく感覚と似ているんですよね。一見合わなそうな素材をミックスしたら、意外とおもしろいものができたりするところも料理と同じ。だからストックがなくなると、すごく不安になっちゃう。うちの冷蔵庫と一緒で、私の頭だってもちろんそういうときもありますよ。もうすぐ夕飯でみんなが帰ってくるけど、冷蔵庫の中になにもない …… どうしよう！　みたいなね。展示会が近づいて焦っているときの感覚は、それに近いかな（笑）。

自分が楽しいなら、周りの人も楽しいはず。

楽しくて幸せな気分、つまりハッピーを提案したいっていうのは、ずっと前から思っていたこと。「TSUMORI CHISATO」を立ち上げる前に「I.S. chisato tsumori design」のチーフデザイナーをやっていたときも、おもしろくてみんなに楽しんでもらえるような服をつくりたいなといつも思っていました。もっと言うと、物心ついた頃から漠然とそんなことを考えていたのかもしれません。

I.S. chisato tsumori design

イッセイミヤケインターナショナルでデザイナーをしていた津森さんが、1983 年、チーフデザイナーに就任して立ち上げたブランド。前身は「ISSEY SPORT」。「WAKU WORK 津森千里の仕事展」で復刻し、T シャツやブルゾンなどが会場限定で販売された。

絵を描くのが好きな子どもで、といってもほんとにみんなが描くようなチューリップとか、女の子の絵とかを描いていたんですけど、それを見た人がおもしろがったり、喜んでもらえたことが嬉しかったんですよね。あるとき、私が描いた絵を父親が仕事場に持って行ったんです。「『うちの娘が描いたんだよ』って会社の人に見せたら、『上手だね』って言ってくれたよ」という言葉で有頂天になっちゃって、漫画家になりたいとずっと思っていたくらい。あのときの幼稚園児が、そのまま大きくなっちゃった感じなんです。

自分も楽しいんだったら、周りの人もきっと楽しいに違いないっていう思いが、洋服をつくる原動力なのかもしれません。ハッピーな気分をおすそ分けしたり、シェアしたりして、つながっていけるといいなと思っているので。自己満足かもしれませんが、自分だったらこんな服を着てみたいっていう欲求を形にしたいんです。ひとりのリアルユーザーが、ここにいる感覚ですね。自分が欲しい服を欲しがる人は、ほかにもきっといるだろうし、もし日本にいなかったとしても、ほかの国の女性たちが欲しがってくれるはず、と思ってつくっています。

今は多少変わってきましたが、日本ってパーティに行く機会がどうしても少ないから、ロングドレスを着るチャンスがなかなかなくて、あまり売れなかったりするんです。そういうことを気にせず、お姫様ルックなロングドレスをつくっちゃうこともあるんですけど、夏のカンヌとか香港なんかでは人気だったりするから。人とはちょっと違う格好をしたいっていう方が、買ってくださるんでしょうね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

update_2018.11.21 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

時代と逆行している私は、絶滅危惧種。

小さい女の子って、リボンをつけたり、フリルをつけたりするだけで、すごく喜ぶじゃない？大人になって頭に大きなリボンをつけるのはちょっとつらいかもしれないけど、下着とかにさり気なくついているだけで気分が上がったりするでしょ。かわいらしさっていうのは、年齢を問わず永遠に女性が好きなものなんでしょうね。

その点、「TSUMORI CHISATO」の服は女の子っぽいけど、セクシーな雰囲気もあるんです。だって誰でもそうだと思うけど、ひとりの女の人のなかにガーリィな面もあるし、セクシーなところもあったりするじゃないですか。単にかわいいだけじゃなく、セクシーで、スポーティでもあり、ボーイッシュでもあるほうが魅力的だし、その日の気分で毎日いろんな自己演出をできるのが、洋服のおもしろいところ。そういう意味では、男性よりも女性のほうが遊べるし、洋服やメイクで自己演出をすることで毎日をハッピーに送ることができますよね。

ハッピーの基準は人によって違うけれども、私ができる唯一のことは着るとアガるような洋服をつくって、その気分を共有すること。人が楽しそうにしているのを見ると、周りもなんとなくハッピーになれるじゃないですか。反対に悲しい気持ちや嫌な気持ちみたいな、ネガティブな感情も連鎖しやすいものだけど、せっかく連鎖するなら楽しいほうがいいですからね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

それを「愛」って言葉に置き換えると照れくさいんだけど、やっぱり洋服は愛をもってつくらないといけないですよね。着る人は、愛がこもっているかどうか敏感にわかっちゃうものなんです。手を動かしてつくったものには温かさがあって、図案ひとつとっても、手描きのものとタブレットで描いたものとでは、愛の伝わり方が全然違う気がします。私は生地にストーリーを感じることがよくあるのですが、素材なんかも天然のものには愛を感じちゃいますね。手がかかればかかるほど、人の念がこもってパワーが生まれるから。今は時代的に効率化の方向に進んで、手仕事がどんどん難しくなっていますが、手をかけてつくったものには愛がある。私は時代に逆行するような服のつくり方をしているので、自分のことを絶滅危惧種って呼んでいるんです。

子どもの感性をもっと世の中に発信するべき。

私の展覧会に、7 歳の女の子がお母さんと一緒にいらしていたんですけど、その子は 6 歳の頃からファッションデザイナーになりたいと言っていて、子ども向けのファッション・スクールに通っているらしいんです。最初は塗り絵とかから始めて、先生がサポートしながら最終的にはファッションショーをやったりするみたいで、すごいですよね。あと私の知り合いにイタリア人と日本人のハーフで 5 歳くらいの女の子がいるんですけど、その子は自分が着る服を毎日自分で選ぶんですって。私がその子たちくらいの年齢のときは、野原を駆け回って地面に木で絵を描いていたから、今思うと全然 " おしゃま " じゃなかったですね（笑）。

子どもたちの才能を伸ばすためにも、ファッションやデザインについて学べる環境が、美術学校や服飾学校以外にもっといろいろあったらいいんじゃないかなって思います。専門用語や技術を学ぶのであれば、そういう学校に行くのが一番近道でしょうし、何かと便利ですけど、それ以前に子どもが楽しみながらファッションやデザインに興味を持てる場があるといいですよね。それに、子どもの感性でできたものが、世の中にもっとたくさんあったらおもしろいじゃないですか。子どもの描いた絵ってパワーを感じるし、大人は絶対に真似できないかわいさがあるから。

だからたとえば、子どもが T シャツに自由に絵を描く「子ども T シャツ展」とか「子どもデザイン展」みたいなのをやってみたらおもしろいんじゃないかしら？　希望も感じられて、それこそ見る人をハッピーにしてくれますよね。子どもはほんと、みんな天才ですよ。あざとい感じがしないというか、売り上げのことを考えない素直さがいいんでしょうね（笑）。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

津森千里 ファッションデザイナー
CHISATO TSUMORI / Fashion Designer

update_2018.11.21 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

ほっとできるスペースに困らないのがリッチな街。

80 年代とかは AXIS ギャラリーによく通ったりしましたけど、六本木は歓楽街のイメージが強かったから、あまり縁がなかったんですよね。でも個人的には、東京ミッドタウンができたことによって街のイメージがよくなった気がします。21_21 DESIGN SIGHT の周りにある公園とかは、ほっとできて好きなんですけど、六本木に限らず東京の街はもうちょっと空気が良くなったり、緑が多くなったりして、ゆとりが生まれるといいですよね。

ニューヨークも大都市ですけど、小さい公園が街なかに点在していて、人と自然が意外と近かったりするじゃないですか。その点、東京は大きい公園がぽつんぽつんとあるけれども、小さな公園には子どもが遊べるちょっとしたスペースがあるくらいで、子ども連れじゃない大人はなんとなく入りづらかったりしますよね。私の家の周辺なんかは、200 メートル歩いても緑があるのかしら？っていうくらいで、ようやく緑のあるスペースに辿り着けたとしても、地面がコンクリートに覆われていたりして、くつろげないんですよね。

パリなんかも街を歩いていて、ちょっとお茶したいなって思ったらどこに行こうか迷ってしまうくらい、そういう場所をすぐに見つけられるじゃないですか。しかもテラスになっているスペースがたくさんあって、向こうの人たちは屋外で過ごすのが大好きですよね。たまに、こんなに空気の汚れているところでくつろげるの？　って思っちゃうようなテラスもありますけど。東京は座ってコーヒーを飲める空間を探すのもひと苦労。外でのんびりするより、屋内で過ごすほうが、落ち着く人たちなのかもしれないですね。東京ミッドタウンみたいにテラスが充実している場所は、東京では意外と珍しいみたいですけど、日常でそうやってほっとできるスペースがあることが、私はリッチだなあと思うんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

旅は洋服をつくるヒントであり、リフレッシュの場。

街から受ける刺激という意味では、ニューヨークもおもしろいけど、パリは色が違って見えません？　日本だとバキバキッとクリアに見えちゃうようなものが、もっとロマンチックに見えるんですよね。空の色が違うからなのかな？　ミケランジェロはイタリア人ですけど、パリの空は彼が描いた空みたいに紗がかかってふわふわして見えるんです。東京の空は「運動会!」って感じ（笑）。

2019 年の春夏コレクションは、旅で行ったエジプトからインスピレーションを得ています。パピルスの花をイメージして絵を描いたり、ナイル川をクルーズしたときに見た水面のキラキラした感じがすごく心に残っていたから、その雰囲気を再現してみたりして。私にとって旅は、洋服をつくるヒントと、リフレッシュと異文化交流。いろんな国の文化や生活など、知らないことを知るのはすごく楽しいし、日本は島国だから海外に行くと、普段いかにボーッと過ごしているか気づいちゃったりするじゃないですか。そうやっていろんなところに行った思い出を、洋服に落とし込むことはよくありますね。

2019 年春夏コレクション

テーマは「Exotic Experience」。壁画に描かれている衣装を現代風にアレンジしたり、ツタンカーメンを大胆に手描きしたりなど、津森さんがエジプトの王家の谷で出会った神秘的な景色や様式を、ポップに表現している。

ハッピーもいいけど、ウェルネスも大事。

4 月にこれまでの仕事を網羅した『TSUMORI CHISATO』という本を出版しました。10 月には初めての展覧会も開催して、偶然なのですが今年は集大成的な年になりましたね。といっても、これから何か変わったことをしようっていう気負いも特にないのですが、新しいプロジェクトをあげるとするなら「I.S.」をリスタートしたことかな。三宅一生さんは私がデザイナーを志すきっかけになった方で、学生時代にコンペに応募したのも一生さんに自分の作品を見てもらいたかったからなんです。学校を卒業して、一生さんの下で働かせてもらうことになりましたし、今回の展覧会も「I.S.」のリスタートも、一生さんが後押ししてくださったおかげで実現できました。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

「I.S.」も「TSUMORI CHISATO」もそうですけど、昔つくったものを見ると、「今でも着れるんじゃない!?」と思う服がたくさんあります。故きを温ねて新しきを知るじゃないですけど、「こんなことやってたんだ!」「このテクニックをまた使ったらどう?」っていう発見がいろいろあるので、自分のつくったものをリメイクするのも全然ありかなって。それこそ堂々とできますからね。

今個人的に関心があるのは、健康と食生活。仕事をするうえでもこのふたつは大切ですし、とても密接なものだと感じているので、これからはウェルネスウェアをフォーカスしていきたいですね。ハッピーもいいけど、ウェルネスも大事。ハッピーウェルネスよね、やっぱり!

『TSUMORI CHISATO』(Rizzoli)

「TSUMORI CHISATO」の歴史を綴った書籍で、2018年 3 月に出版。海外でも同時発売。津森さんによるドローイングやスケッチのほか、TSUMORI CHISATO のプリント図柄など、歴代のコレクションのアーカイブに留まらない、津森さんの自由で奔放な発想が垣間見れる一冊。アートディレクションは佐藤卓さん。

取材を終えて .....

「自分が楽しいことは、人も楽しいと感じてくれるに違いない」という信念をお持ちの津森さん。「まずは自分が楽しむ」という前提がありながら、周りの人を楽しませようとするホスピタリティが、その話しぶりからうかがえました。それにしても、過去のコレクションや作品集『TSUMORI CHISATO』について説明する姿は、本当に楽しそう!　そのエネルギッシュなパワーと深い愛情が、ハッピーの連鎖を生むのだと実感しました。(text_ikuko hyodo)

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.